

將來の大國民

黒田 清輝氏談

私は一體出不精で御座いまして、運動會とかいふものにも餘り参りません方ですが、先日は御店から御叮嚀なる御案内状で、瀟車の切符まで下さいましたものですから、幸ひ正午頃より天候も好くなりましたし、遊び旁御邪魔に参りました。中途から参つたやうな次第で別に申上げる程の感想とても御座いません、彼程あれほど多數の人を一場に集めて靜肅に一糸紊れず各種の競技、餘興等をやられましたのは驚嘆の外は御座いません、競技餘興等も随分面白いのや珍らしいのがありました。其中でも坪井博士の御考案になる歌留多取り、あれは實に好い思付であると思ひました、私は一體無風流で歌留多といふ室内遊戯があるとは聞いて居ましたけれど餘り興味を持ちませんでした、あゝして野外でやるのを見ますと運動にもなり面白くもあり大變結構な競技であると感じました、常に室内の運動ばかり爲すつて入られる御店の店員の方などにはあゝして野外で一日を面白可笑しい中に送るといふ事が甚と麼なに好い事です。餘興の中には私共の子供の時分芝の山内とか縁日とかで見た以來、絶えて久しく見ないのもあつたのです、其他に思付いたやうな事ありませんでしたが、唯一つ彼のあ様な大規模の慰勞會を開きますといふ事は非常に好い事のやうに考へられます。一體多くの人を使役して居る所では専心自己の利益のみ計るので、使用人の利益といふ事は一向に考へません、是は外國に於ては殊にさうで主従の關係が極めて親密でない、主人と使備人、つまり使ふ人と使はれる人との交情なかが疏通して居ないから、誤解もあり間違ひも起り、遂

には同盟罷業など申す事も起るのです。日比さんは此處に着眼されて遂には今回のやうな事をなされたのでせう。私共は其處を非常に感心しますので、丁度さう思つて慰勞會を歸つてから二三日経つて、元の秀英舎社長佐久間貞一氏の第十三回忌が精養軒でありまして、私も故人とは親密に致して居りましたから参りましたが、其節角田眞平氏が佐久間氏の性格に就いて種々なる方面からの觀察を發表されました。其中に一つ慥う言ひ事がありました、佐久間氏の生時多くの人を使つて居る人々が、たゞ自分の利益を計るのみに汲々として、少しも使つて居る職工といつたやうなものゝ利益を計らない、之を計れば必ず自己の利益を得られなくなる、今の状態では雙方の好都合には絶対に行かぬやうに考へて居た、佐久間氏は之ではならぬといふので専ら自己の利益といふ事を顧みず、出来るだけ職工の利益を計る事に苦心したとの話でした。私は慰勞會を見て日比氏の考へに感心して居りました。矢先此の話を耳にしましたものですから、一層深く感心しました。世間には殊に甚しいのになると主人が無理に雇人の不利益を計るのもあります、境遇の相違から心が離れ互に反目するのは面白くありません、日本人同胞としても出来るだけ互の利益を計り和協々力して行きたいのです、此點に於て彼の慰勞會は非常な成功と言ひ度いのです。物質上のみならず徳義上から申しましても、將來の大國民として文明人の仕事として斯様な催のあるのは結構な事と存じます。世の中が六ヶ敷なつて來るに従つて奴隸的に雇はれても致方がなくなる、此時佐久間氏や日比氏のような人があつて、使傭人の身に絶えず愉快を與へるといふ様に注意すれば、日本國の商業工業社會の前途も之が爲め主人と雇人と永久に融和し圓滿に行くだらうと存じます。

明治四三年、天長節にあたる二月三日に、三越呉服店店員の大がかりな慰労会が鎌倉で行なわれた。これは千五百余名の三越店員が新橋から列車を借り切つて鎌倉へ移動し、鶴岡八幡宮へ参拝したのち由比ガ浜で各種の運動競技や催しに興じたもので、前年の明治四二年より専務取締役の日比翁助（一八六〇～一九三三年）の提唱により開催された。一方黒田は日比が掲げた「学俗協同」のスローガンのもと、各界の学者、著名人や文化人を集め、交流の場を設け定期的に催した流行会の一員であり、「自然を無意味に寫すと不自然となる」（本書四八三～四八七頁）にもあるように、三越での懸賞写真の審査員もつとめている。三越における日比翁助の活動については、初田亨『百貨店の誕生』（三省堂平成五年二月）、山口昌男『敗者』の精神史（岩波書店平成七年七月）を参照。

なお黒田が感心した「坪井博士の御考案になる歌留多取り」とは、人類学者で、やはり流行会の会員であった坪井正五郎（一八六三～一九三三年）が考案した競技で、二十名の女子店員が紅白二軍に分かれ、百人一首の書かれた二尺三尺の歌留多を取りあうものだった。